

病虫害発生予察情報予報第 4 号（8 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
水稻 (早期)	紋枯病	並	斑点米カメムシ類 
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稻 (山間早植え)	穂いもち	並	クモハカメシ ホハカメシ
	紋枯病	やや多	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稻 (普通期)	穂いもち	並	 トビイロウンカ イネカメシ
	紋枯病	やや多	
	白葉枯病	並	
	もみ枯細菌病	並	
	トビイロウンカ	並	
	コブノメイガ	やや多	
	フタオビコヤガ	並	
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稻全般	1. 斑点米カメムシ類 水稻の出穂 10 日前までに畦畔を含めて除草を行うとともに、乳熟期（穂揃い期の約 10 日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその 7～10 日後に薬剤防除を行う。		
	2. イネカメムシ 他の斑点米カメムシ類と異なり、水稻の出穂始めに糞を吸汁して不稔を生じさせることから、出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、発生状況に応じて出穂期の防除を行う（令和 7 年 7 月 14 日付け病虫害対策資料第 8 号参照）。		
水稻全般	3. 紋枯病 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂 20～10 日前を目安とする）に防除を徹底する。		
	1. トビイロウンカ 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図 1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや少	 炭疽病による葉の汚斑型病斑
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	やや多	
	ハダニ類	やや多	
	アブラムシ類	やや少	
	1. 炭疽病 定期的な薬剤防除を行い、特に強風雨や台風の襲来が予想される場合は予防防除を徹底する。灌水や管理の際に苗を確認し、葉の汚斑型病斑や立枯れ等の発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し処分する。		
アスパラガス	茎枯病	並	 ネギアザミウマ
	褐斑病	やや少	
	斑点病	やや少	
	アザミウマ類	やや多	
	ハダニ類	やや多	
1. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬剤が茎葉内部や株元まで到達しにくいので、不要な茎葉は整理する。また、かけムラが生じるのを防ぐため、株外側からの散布に加え、ノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど、十分な薬量で丁寧に散布する。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)	
果樹全般	果樹カメムシ類	並		チャバネアオカメムシ
	1. 夜蛾類 気象予報では気温が高いと予想されており、夜温 25℃以上の日が続くと活動が活発となって被害が多発するおそれがあるため、忌避灯の設置など防除対策を徹底する（令和7年7月2日付け病虫害対策資料第6号参照）。 2. 果樹カメムシ類 本年は餌となるヒノキの球果数が多く、今後、秋にかけて増殖して発生が多くなると予想されるため、発生状況に注意する。			
	かいよう病	多		かいよう病
黒点病	並			
ミカンハダニ	多			
チャノキイロアザミウマ	多			
カンキツ	1. ミカンサビダニ 新たに被害が確認された場合は早急に防除を行うとともに、例年多発する園では、8月中下旬頃の防除を徹底する。 2. かいよう病 台風の襲来等強風雨が予想される場合、すでに発生が確認される園、本病が発生しやすい園および幼木園では、襲来7日前～前日までに必ず薬剤防除を行う。 3. アザミウマ類 チャノキイロアザミウマによる後期被害を防ぐために、8月中旬～9月上旬頃の防除を徹底する。また、ハナアザミウマ類による着色期の果実被害を防止するため、発生源となる園内及び園周囲の雑草は、着色期前までに除草を行う。 4. カネタタキ 8月の気温は高いと予想されており、本虫の活動に好適な条件となっているため発生に注意し、被害が確認され始めたら薬剤を散布する。			
	ナシヒメシンクイ	多		ハダニ類
	ハダニ類	多		
	ナシ	1. ナシヒメシンクイ 今年は発生が多い。7月以降は世代が混在するため7～10日間隔で薬剤散布を行う。交信攪乱フェロモン剤設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。 2. ハダニ類 ハダニ類は、寄生密度が高くなると防除が困難になるため、低密度時（寄生葉率 10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）から防除を徹底する（令和7年7月18日付け病虫害対策資料第9号参照）。		
べと病		多		べと病
ブドウ	褐斑病	並		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	8月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
茶	炭疽病	並	 輪斑病
	輪斑病	多	
	カンザワハダニ	多	
	クワシロカイガラムシ	並	
	チャノキイロアザミウマ	多	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
	チャノコカクモンハマキ	やや多	
	チャノホソガ	並	
1. 輪斑病 複数の圃場で発生がみられている。葉や茎の傷口から感染するため、整枝後は直ちに防除を行う。 2. チャノキイロアザミウマ 秋芽の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。			

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

8 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 8 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 7 年 7 月 24 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 8 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	30 (28.2℃)	60	高い
降水量	30	40 (252.4 mm)	30	並

Ⅲ. 8月の予報

水稻（早期、上場地域）

定期調査：12 圃場

調査日：7月23日

[【概要に戻る】](#)

1. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0.3%（平年1.4%、前年0%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

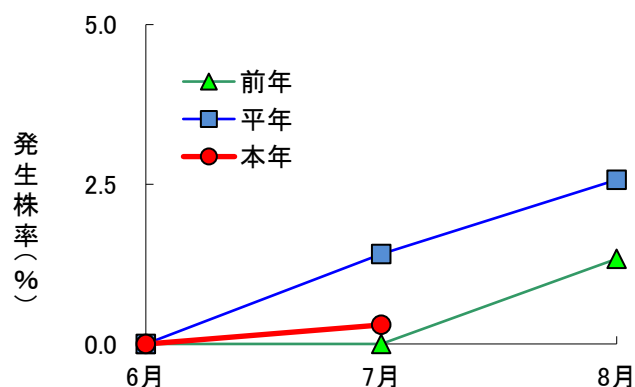


図1 早期水稻での紋枯病の発生推移

2. 斑点米カメムシ類

水稻（早植え）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：12 圃場

調査日：7月24日

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）【葉いもち】

発生株率 0 %（平年2.7%、前年0%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 進展型病斑がみられる圃場では早急に薬剤防除を行う。

(2) 葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を実施する。発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも薬剤防除を行う。

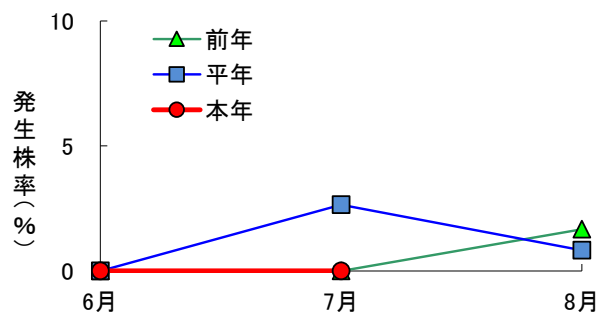


図1 山間早植え水稻でのいもち病の発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率 0%（平年 0.1 %、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする）に防除を徹底する。

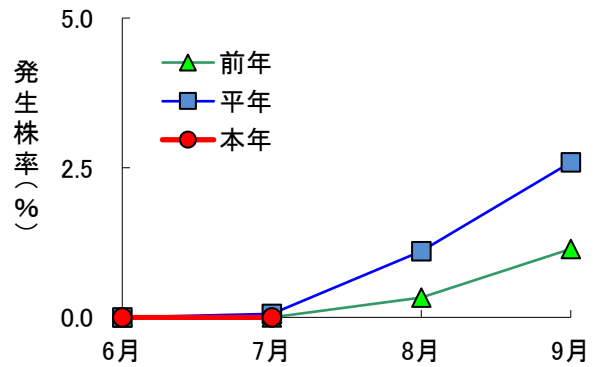


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) これまでの飛来状況

6月16日頃、22日～23日頃に飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から7月21日までの総捕獲数は（共通-表1）、直近10年間（2016～2025年）の中で3番目に少ない。（－～±）

(2) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率 0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

(3) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。

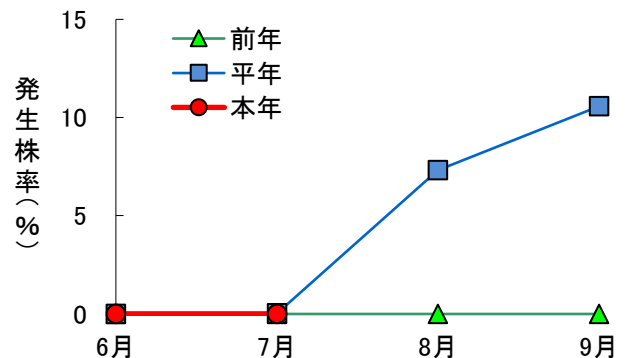


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

4. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) これまでの誘殺状況

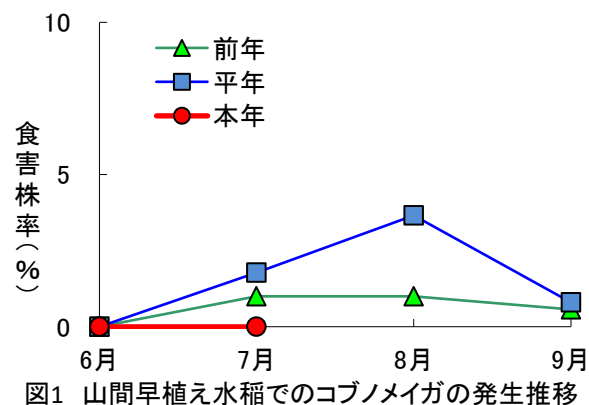
6月16日以降、県内のライトトラップで断続的に誘殺されている（共通-表1）。（±）

(2) 発生の現況

- ①定期調査（図1参照）
発生株率 0%（平年1.8%、前年 1.0%）
平年比：やや少（－～±）

- (3) 8月の気象予報
気温は高く、多発生の条件（＋）

- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、発生予測図（共通一図2）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を
確認したうえで幼虫ふ化揃い期（発蛾最盛期の7日後）に
防除を実施する。



5. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等)

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い
- 2) 予報の根拠
(1) イネ科雑草での捕虫網によるすくい取り調査（7月18～24日）
発生量は、平年並～やや多（表1）。〈±～＋〉
(2) 8月の気象予報
気温は高く、多発生の条件（＋）
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 水稻の出穂10日前までに畦畔を含めて除草を行う。
(2) 乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。多発生の場合は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果
20回すくい取り虫数(2025年7月17日～24日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカスジカスミカメ		ミナミアオカメムシ	イネカメムシ	
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫			
佐賀市西与賀町	空地	イノコグサ類	0	0	5	0	0	0	9	0	0	0	0
佐賀市東与賀町	空地	イノコグサ類	10	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0
小城市三日月町	河川敷	イノコグサ類	3	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0
唐津市鎮西町1	畦畔	イノコグサ類	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
神埼市神埼町	道端	オヒシバ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
鳥栖市三島町	畦畔	オヒシバ	0	0	3	0	0	0	119	111	0	0	0
多久市南多久	畦畔	イノコグサ類	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0
伊万里市二里町	空地	イノコグサ類	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊万里市二里町	空地	イノコグサ類	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0
伊万里市東山代町	空地	イノコグサ類	6	2	6	0	0	0	45	4	0	2	0
伊万里市松浦町	空地	イノコグサ類	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
武雄市橋町	空地	イノコグサ類	8	2	18	0	0	9	12	2	0	0	0
武雄市橋町	空地	イノコグサ類	0	0	2	0	1	0	7	0	0	0	0
鹿島市	河川敷	イノコグサ類	0	0	4	0	0	0	17	12	0	0	0
嬉野市嬉野町1	空地	オヒシバ	0	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0
上峰町	畦畔	オヒシバ	0	0	1	0	0	0	5	12	0	0	0
白石町1	河川敷	イノコグサ類	0	0	14	1	0	0	42	14	1	0	0
白石町2	河川敷	イノコグサ類	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
本年（平均）			1.7	0.6	4.1	0.1	0.1	0.6	14.2	8.6	0.2	0.2	0.0
平年（過去10年の平均）			2.5	2.6	1.3	0.4	0.2	0.6	14.1	8.6	0.03	0.0	0.0
平年比			やや少	やや少	多	やや少	やや少	やや多	並	並	多	多	並
前年（平均）			5.8	6.9	3.6	0.9	0.4	0.1	13.3	5.8	0.0	0.0	0.0

水稲（普通期）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：48 圃場
調査日：7月17日～24日

1. 穂いもち

1) 予報の内容
発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）【葉いもち】

発生株率 0%（平年2.6%、前年 0%）

平年比：やや少（～±）

(2) 感染好適条件発生状況【県内、隣接県 計10地点】

BLASTAM（7月6日～24日）では、準感染好適条件が、7月9日～13日、7月16日、19～20日にかけて出現した（表1、図2）。〈±〉

(3) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 水稲（山間早植え）の穂いもちの項参照。

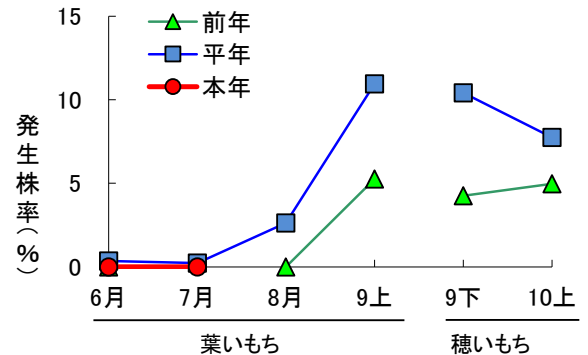


図1 普通期水稲でのいもち病の発生推移

表1 BLASTAMによる葉いもち感染好適条件の出現状況(令和7年)

月	日	佐賀					福岡			長崎	
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
7月	6日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9日	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—
	10日	—	3	—	2	—	—	—	3	3	—
	11日	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—
	12日	3	—	—	—	—	—	3	—	—	3
	13日	—	3	—	—	—	3	—	3	3	—
	14日	—	—	—	—	—	—	3	3	—	—
	15日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	16日	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—
	17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	18日	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
	19日	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—
	20日	—	—	—	2	3	—	3	—	—	—
	21日	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—
	22日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	24日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

- 1：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満）
2：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上）
3：準好適条件（湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15～25℃の範囲外）
4：準好適条件（湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い）
●：好適条件（湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した）
—：好適条件の出現なし
？：判定不能

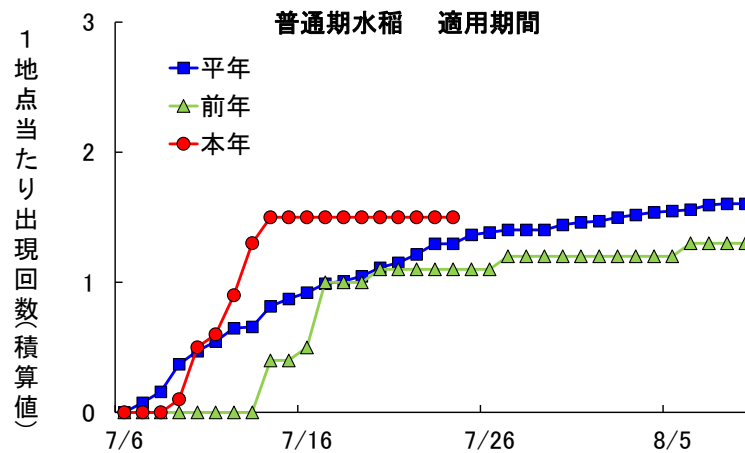


図2 BLASTAMIによる準感染・感染好適条件の出現回数
(6月16日移植の場合：適用期間7月6日～8月9日)

2. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い

- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況

- ① 定期調査 (図1参照)

発生株率 0% (平年0%、前年0%)

平年比：並 (±)

- (2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件 (＋)

- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年、多発傾向にあるため、各圃場における発生状況を確認し、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展する時期 (液剤、粉剤の場合は出穂20～10日前を目安とする) に防除を徹底する。

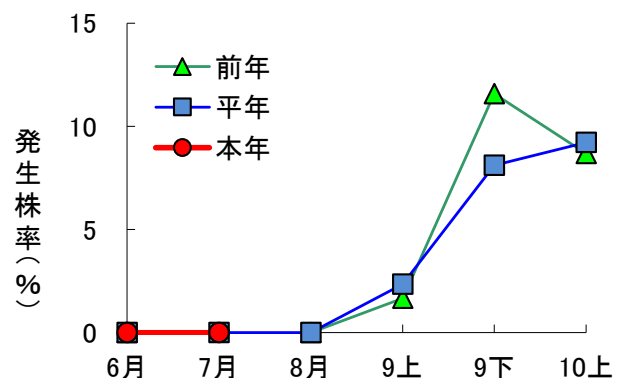


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

3. 白葉枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並

- 2) 予報の根拠

- (1) 発生の現況

- ① 定期調査

発生株率 0% (平年0%、前年0%)

平年比：並 (±)

- (2) 8月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

- 3) 防除上注意すべき事項

- (1) 台風等の強風雨後に発生しやすい。発生した場合には拡大を防ぐため葉が乾くまで圃場に入らない。

4. もみ枯細菌病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並

- 2) 予報の根拠

- (1) 8月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気象予報に留意し、開花期間中に降雨が予想される場合は、出穂前後の防除を行う。特に、苗床で発生した圃場では、確実に実施する。

5. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) これまでの飛来状況

6月16日頃、22日～23日頃に飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から7月21日までの総捕獲数は(共通-表1)、直近10年間(2016～2025年)の中で3番目に少ない。〈ー～±〉

(2) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率 0% (平年0.01%、前年0%)

平年比：並〈±〉

(3) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本種の発生状況は、田植え時期、水稻の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図(共通-図1)を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。

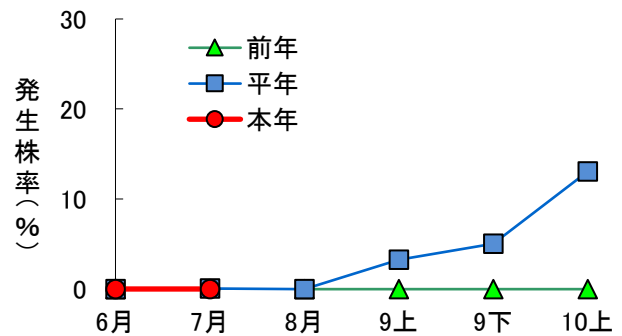


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

6. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) これまでの誘殺状況

6月15日以降、県内のライトトラップで断続的に誘殺されている(共通-表1)。〈±〉

(2) 発生の現況

① 定期調査(図1参照)

発生株率 0.1% (平年1.7%、前年0.7%)

平年比：並〈±〉

(3) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、発生予測図(共通-図2)を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで幼虫ふ化揃い期(発蛾最盛期の7日後)に防除を実施する。

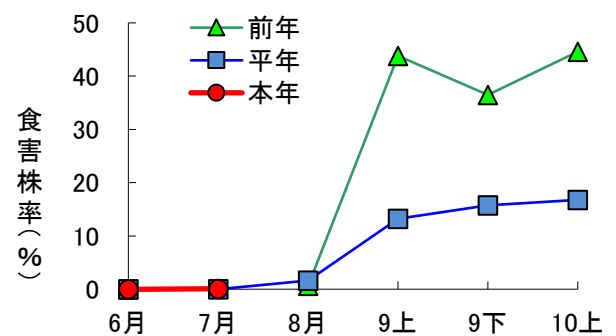


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移

7. フタオビコヤガ(イネアオムシ)

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査

発生株率 0% (平年0.01%、前年0%)

平年比：並 (±)

(2) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 8月中～下旬頃に圃場における発生状況を確認し、上位葉に多数の幼虫が認められる場合には防除を実施する。

8. 斑点米カメムシ類

水稻（早植え）の斑点米カメムシ類の項参照。

共通一表1 イネウンカ類・コブノメイガのトラップ捕獲状況(2025年)

月日		トビイロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ											
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県						長崎県					
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	佐賀市	神埼市	伊万里市	白石町	武雄市	諫早市					
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	フェロモン トラップ	フェロモン トラップ	粘着トラ ップ(20W 蛍光灯)	フェロモン トラップ					
6月	1日	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0				0					
	2日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	3日	0	0	0	0	0	0	0	1							0					
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	8日	0	0	0	0	0	0	0	0							0					
	9日	0	0	0	0	0	0	1	0							0					
	10日	0	0	0	0	0	2	4	0							0					
11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					0						
12日	0	0	0	0	0	1	1	0	0												
13日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
14日	0	0	0	0	1	0	1	0	0												
15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
16日	0	2	0	0	3	9	0	0	0												
17日	0	0	0	0	0	4	0	0	0												
18日	0	0	0	0	3	4	0	4	0												
19日	0	0	0	0	0	2	0	0	0												
20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0						0		1	0	1	6	
21日	0	0	0	0	1	1	0	0	0												
22日	0	1	0	0	0	26	0	1	0												
23日	0	2	0	0	2	126	2	0	0												
24日	0	0	0	0	2	139	0	0	0												
25日	0	0	0	0	2	12	0	0	0												
26日	0	0	0	0	1	8	0	0	0												
27日	0	0	0	0	0	7	0	0	0												
28日	0	0	0	0	0	1	0	1	0												
29日	0		0	0	0		0	0	0	0	0	2	0	1						0	
30日	0		0	0	0		0	0	0												
7月	1日	0	0	0	0	0	2	1	0						0		0	3	0	0	0
	2日	0	0	0	0	0	0	1	0												0
	3日	0	0	0	0	0	1	0	0												0
	4日	0	0	0	0	0	0	0	0												0
	5日	0	0	0	0	0	0	0	0												0
	6日	0	0	0	0	0	0	0	0												0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	0												0
	8日	0	0	0	0	0	0	1	0												0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
11日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0						
12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
13日	0	0	0	0	0	1	0	0	0												
14日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
15日	0	0	0	0	0	0	1	0	0												
16日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
18日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
19日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
20日	0	0	0	0	0	0	0	0	0												
21日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0											
22日	0				0																
23日																					
24日																					
25日																					

注1)ウンカ類:佐賀市のネットトラップは、農業試験研究センターで調査(回収日で集計)。嬉野ライトトラップ(予察灯)は農業技術防除センターで調査。

6月29～30日の嬉野ライトトラップは、装置の不具合により欠測。

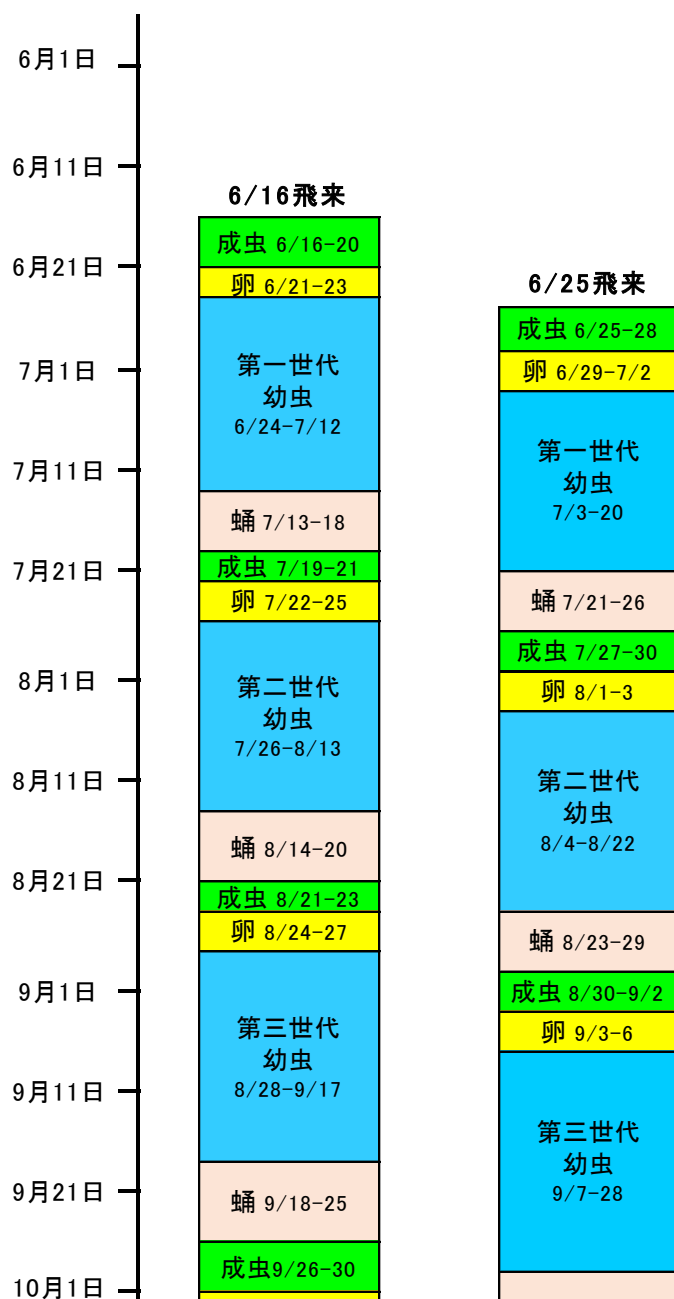
注2)コブノメイガ:神埼市、白石町、伊万里市、武雄市は防除員が調査。佐賀市のフェロモントラップは農業試験研究センターで調査。

※長崎県のデータは、長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室提供。



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測 (第2版、2025年7月18日作成)

1. 6月16日頃、6月22日～23日(図では6月23日)の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ(7月18日以降は平年値)に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 12℃、発育上限温度 28℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。



共通-図2 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2025年7月18日作成）

1. 6月16日頃、6月24日～25日頃（図では25日）の飛来虫を起点とし、コブノメイガの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（7月18日以降は平年値）に基づき作成した。三角法を用い、発育零点 13℃、発育上限温度 28.5℃、発育停止温度 33℃とした。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査：10 圃場

調査日：7 月 17～24 日

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0%（平年 3.9 %、前年 0%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 8 月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を実施する。

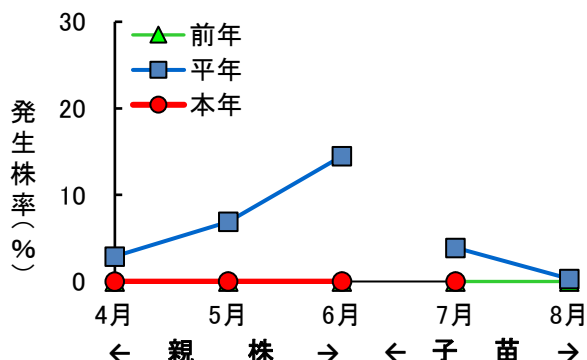


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. 苗立枯症（炭疽病・疫病・萎黄病）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率：0.10%（平年 0.03%、前年 0.09%）

平年比：やや多（±～＋）

(2) 8 月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 定期的な薬剤防除を行い、特に強風雨や台風の襲来が予想される場合は、予防防除を徹底する。

(2) 灌水や管理の際に苗を確認し、発病株を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。

(3) 本病の感染に好適な高湿度条件が長時間続かないように、苗ポットの間隔を十分にとり通風を図るとともに、灌水は天候、時間及びポットの乾き具合を考慮して行う。

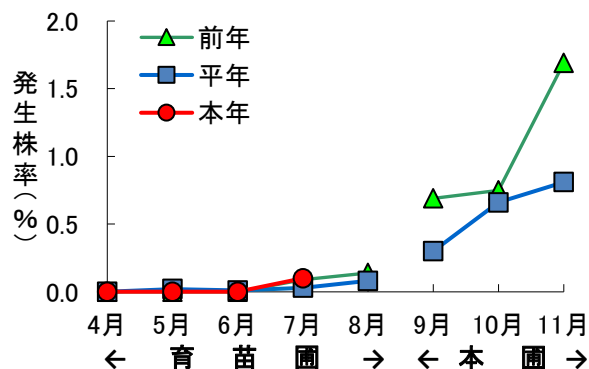


図1 イチゴ立枯症の発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：7.6%（平年 7.5%、前年 12.0%）

平年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する。

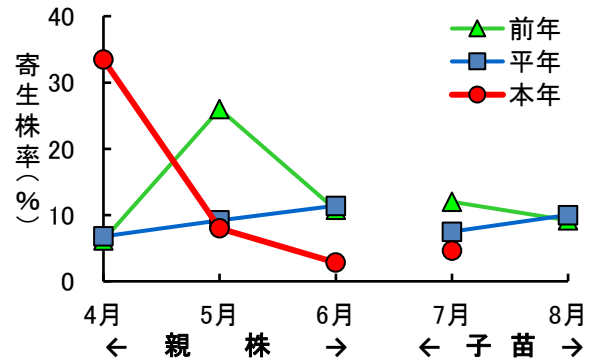


図1 ハダニ類のイチゴ育苗床での発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：7 月 17 日～24 日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生株率：0.6%（平年 2.3%、前年 0%）

平年比：やや少（－～±）

(2) 8月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。
- (2) 感染してから発病までの潜伏期間が20～30日と長いことから、発病前からの3週間間隔を目安とした予防散布を基本とする。なお、前年多発生圃場及び降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

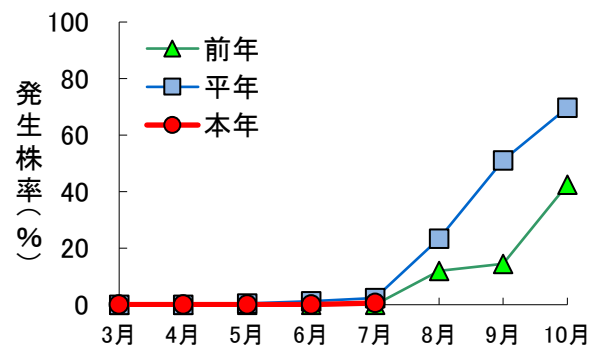


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

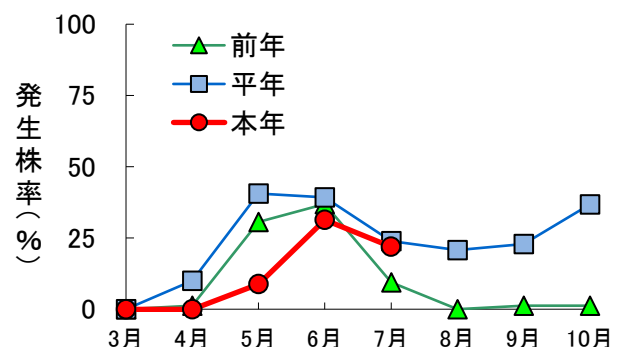


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

発生株率：21.9%（平年 23.9%、前年 9.4%）

平年比：並（±）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生圃場では定期的な薬剤防除を実施する。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：1.3%（平年 0.6%、前年 0.6%）

平年比：やや多（±～＋）

(2) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（＋）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 虫見板への払い落とし等により、発生状況を確認し早期防除に努める。

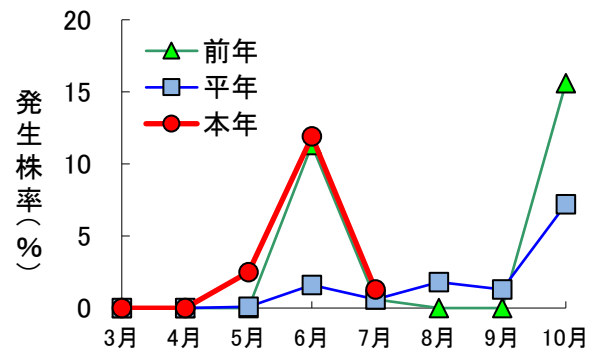


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

果樹園への飛来予想時期：県平均 9月2半旬頃（早い地域は9月1半旬頃）

2) 予報の根拠

(1) 6月1半旬～7月4半旬までの誘殺量

① 予察灯（図1参照）

平年比：やや少（－～±）

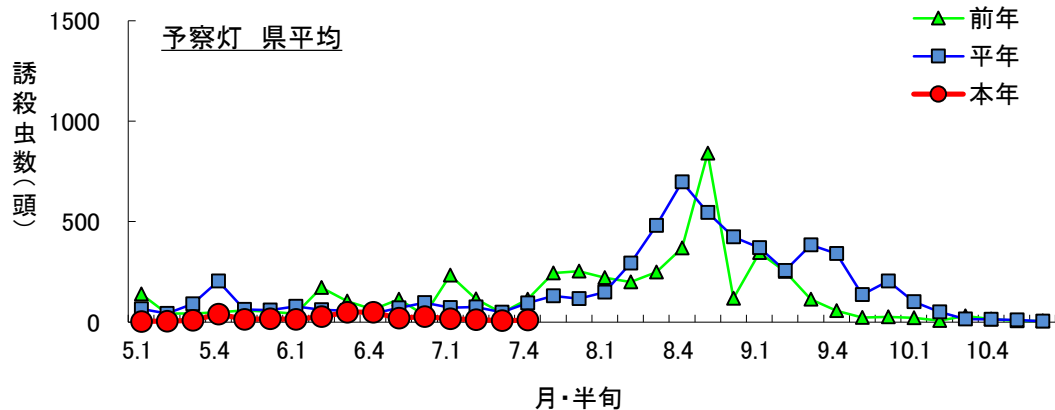


図1 予察灯（佐賀市、小城市）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ（図2 参照）

平年比：少〈－〉

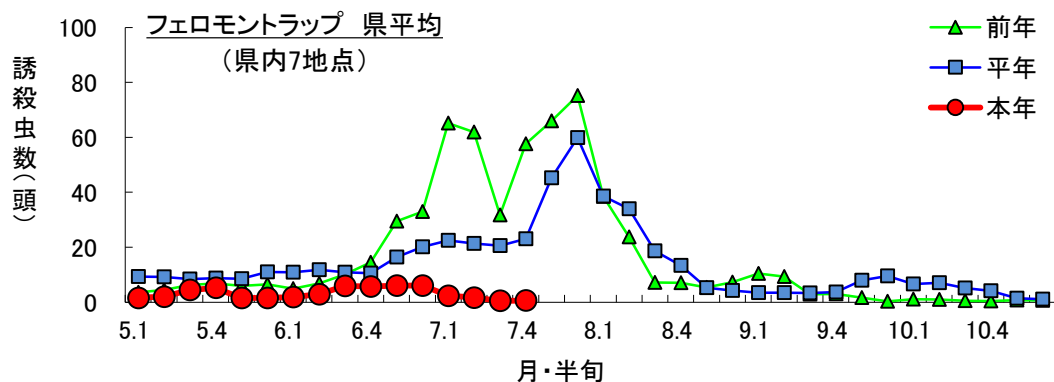


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

(2) ヒノキ球果における寄生数（図3、表1 参照、7月16～23日調査）

成幼虫数平均：2.8 頭（平年 11.9 頭、前年 18.5 頭）

平年比：やや少〈－～±〉

(3) ヒノキ球果における口針鞘数（図4、表1 参照、7月16～23日調査）

口針鞘数平均：0.4 本/果（平年 1.9 本、前年 1.4 本）

平年比：やや少〈－～±〉

(4) 8月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈＋〉

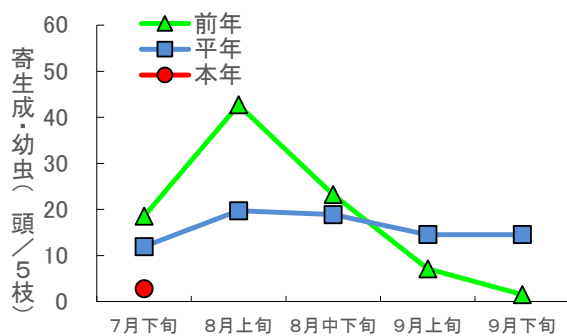


図3 ヒノキ球果における果樹カメムシ類の寄生数の推移

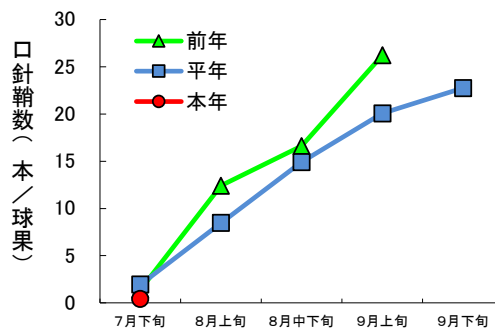


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ球果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ球果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数（図3、4に関する地点別の状況）
（調査日：7月16～23日）

No.	調査地点	ヒノキ球果における寄生状況 ¹⁾			口針鞘数 ²⁾	離脱予測時期 ³⁾ （各調査日から算出）	ヒノキ球果 ⁴⁾ 着果程度
		成虫	幼虫	合計	7月下旬		
1	上峰町堤	0	3	3	0.0	9月2半旬頃～	やや少
2	神崎市脊振町倉谷	2	0	2	0.5	9月3半旬頃～	やや多
3	小城市三日月町織島	0	0	0	0.3	9月2半旬頃～	やや多
4	唐津市太良	3	2	5	0.2	9月3半旬頃～	多
5	唐津市浜玉町平原	0	0	0	0.0	9月3半旬頃～	多
6	唐津市北波多成淵	0	0	0	0.1	9月3半旬頃～	やや多
7	伊万里市大川町大川野	0	0	0	0.6	9月1半旬頃～	やや多
8	伊万里市南波多町原屋敷	0	1	1	0.3	9月2半旬頃～	中
9	伊万里市南波多町笠椎	0	0	0	0.0	9月2半旬頃～	中
10	多久市南多久町	3	0	3	0.9	9月1半旬頃～	中
11	鹿島市古枝	13	1	14	1.7	9月1半旬頃～	多
12	鹿島市嘉瀬の浦	2	8	10	0.5	9月2半旬頃～	多
13	太良町江岡	1	0	1	0.4	9月2半旬頃～	中
14	太良町大浦	0	0	0	0.4	9月2半旬頃～	多
	平均	1.7	1.1	2.8	0.4	9月2半旬頃～ ⁵⁾	やや多
	平年	—	—	11.9	1.9		
	前年(R6年)	—	—	18.5	1.4		少

1)たたき落としによる調査

2)口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ球果が餌として不適となりカメムシがヒノキ球果より離脱する傾向

3)各調査日における口針鞘数～離脱予想時期(25本/果に達する時期)の平均値より算出

4)ヒノキ球果着果程度：福岡総農試の達観調査法に基づいて調査

・極少：一部の木では上部にも球果が見られるが、多くの木では上部にも球果がない。

・少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果がある

・やや少：球果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には球果があり、一部の木では中央部にもみられる

・中：中央部まで球果が見られる木が多い

・やや多：多くの木では中央部までたくさんの球果が見られ、一部は下部にも球果がある

・多：下部まで球果が見られる木が多い

・極多：ほとんどの木で下部までたくさんの球果が見られる

5)離脱予想時期の県平均は、各調査日及び口針鞘数の平均値により算出

※ヒノキ球果における寄生虫数、口針鞘数は地形等により差が大きいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないよう剪定をする。飛来状況は地域や園地によって異なるため、園内外をこまめに見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を生じる場合があるので、これら害虫の防除対策も実施する。
- (3) 本年は餌となるヒノキの球果数が多く、今後、秋にかけて増殖して発生が多くなると予想されるため、発生状況に注意する。

定期調査 8 圃場

調査日：7 月 16～23 日

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1、2 参照)

発生葉率：0.3% (平年 0.1%、前年 0.5%)

平年比：多 (+)

発生果率：0.14% (平年 0%、前年 0.01%)

平年比：多 (+)

(2) 8 月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種 (ネーブル、はるみ等) の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園 (幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等) では、無機銅水和剤 (クレフノン 200 倍加用) で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。
- (2) 台風の襲来等強風雨が予想される場合、本病が発生しやすい園および幼木園では、襲来 7 日前～前日までに必ず薬剤防除を行う。
- (3) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。
- (4) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、枝が遅くまで伸長し本病にかかりやすい期間が長くなるため、強剪定は行わない。

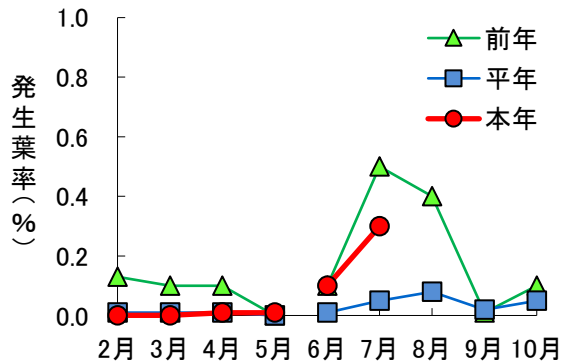


図1 カンキツかいよう病の発生推移
注) 5 月下旬までは旧葉を調査

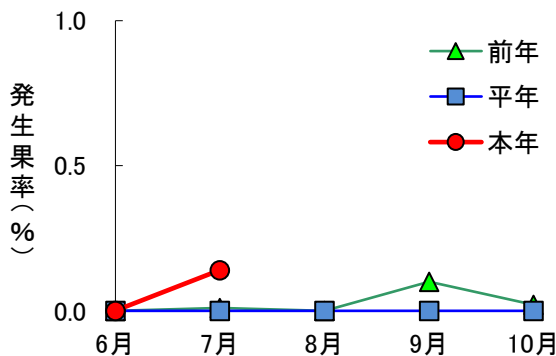


図2 カンキツかいよう病(果実)の発生推移

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生果率：10.1% (平年 5.7%、前年 10.3%)

平年比：並 (±)

(2) 8 月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が 200～250mm に達した時点を目安とする。ただし、同

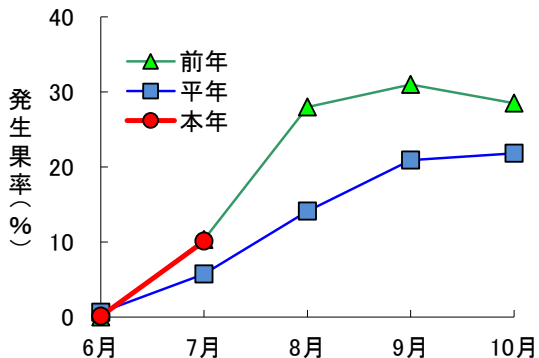


図1 カンキツ黒点病の発生推移

雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。

- (2) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は伐根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：11.3%（平年2.8%、前年9.9%）

平年比：多〈+〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
 (2) マシン油乳剤を7月以降に使用すると果実腐敗の発生を助長したり、糖度の低下を招いたりする場合があるので使用しない。

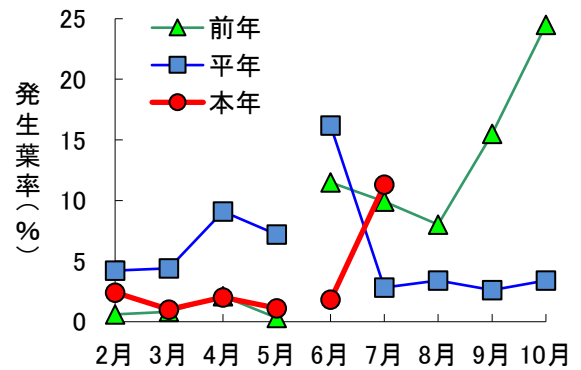


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
 注)5月下旬までは旧葉を調査

4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生果率：1.1%（平年0.2%、前年0.1%）

平年比：多〈+〉

② 黄色粘着トラップ（図2参照）

平年比：並〈±〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

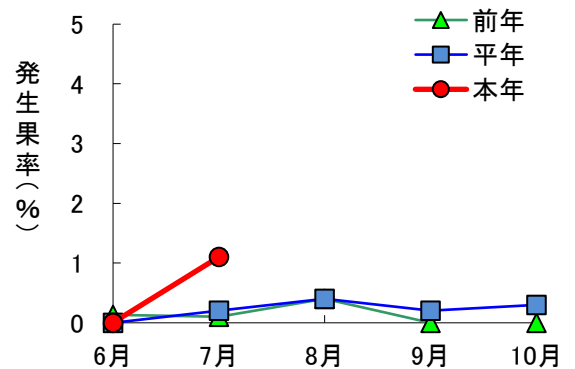


図1 チャノキイロアザミウマによる被害果の発生推移

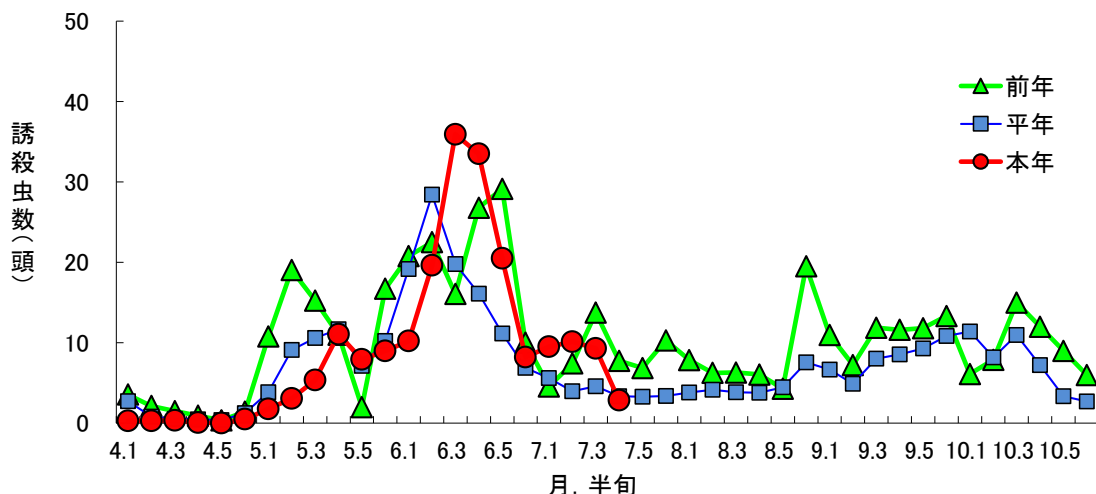


図2 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移(小城市 果樹試験場調査)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) チャノキイロアザミウマによる後期被害を防ぐために、8月中旬～9月上旬頃の防除を徹底する。
- (2) ハナアザミウマ類による着色期の果実被害を防止するため、発生源となる園内及び園周囲の雑草は、着色期前までに除草を行う。

ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 9 圃場

調査日：7月17日

1. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① ナシ園地に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比：多<+>

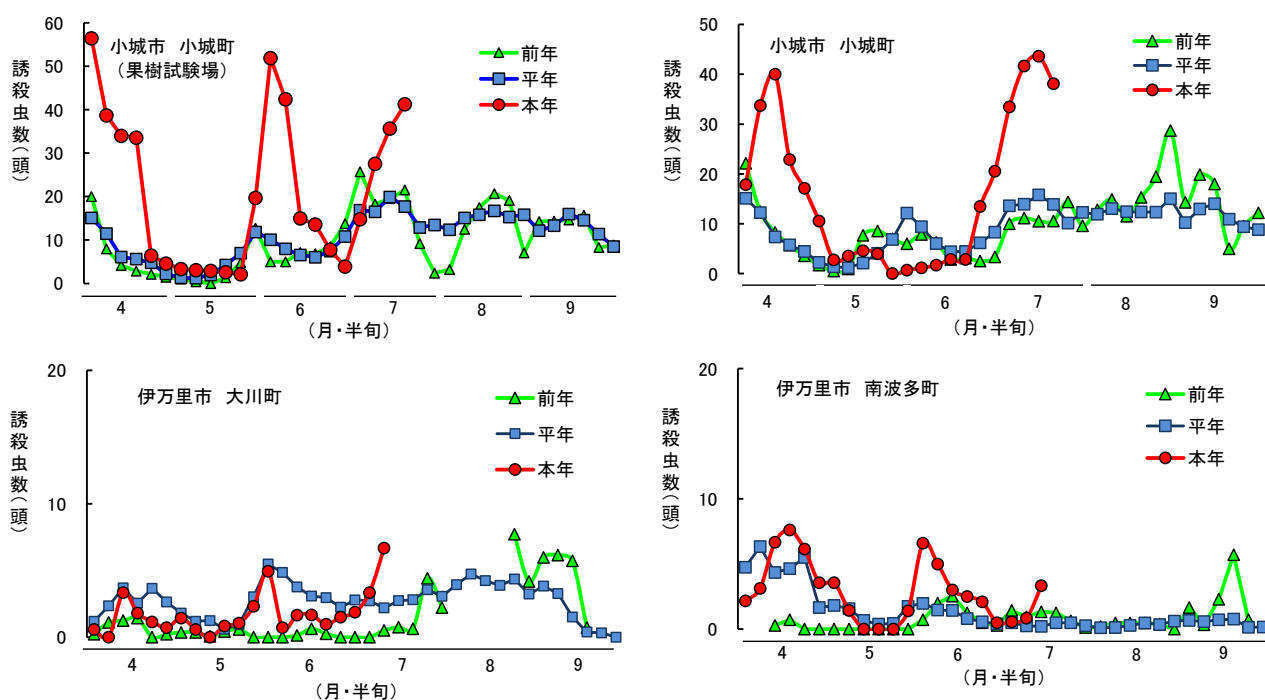


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦地域振興センター調査)

(2) 8月の気象予報

気温は高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 7月以降は世代が混在するため、7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (2) 交信攪乱フェロモン剤設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：37.8%（平年4.0%、前年15.4%）

平年比：多〈+〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 園内をよく観察し、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの防除を徹底する。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

(3) 令和7年7月18日付け病害虫対策資料第9号を参考に防除を徹底する。

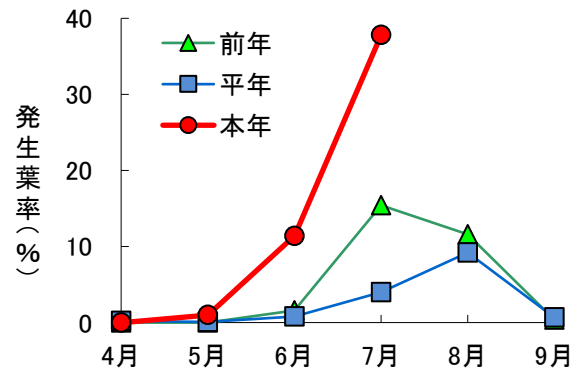


図1 ハダニ類のナシでの発生推移

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 6 圃場

調査日：7月16~23日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：11.0%（平年3.8%、前年14.0%）

平年比：多〈+〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は降雨によって感染が助長されるので、降雨前の予防散布を徹底する。また、防除効果を高めるため、棚面の上からも散布する。

(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

(3) 本病の罹病葉・果実は伝染源となるので、必ず除去し、園外に持ち出し適切に処分する。

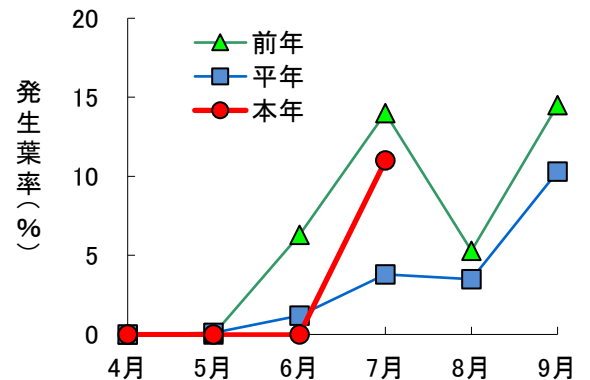


図1 ブドウべと病の発生推移

定期調査：7 圃場

調査日：7 月 22 日～23 日

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生葉数：11.6 枚/m² (平年 10.5 枚、前年 48.6 枚)

平年比：並 (±)

(2) 8 月の気象予報

降水量は並で、並発生条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は雨滴により新芽に感染するため、開葉初期に降雨前の予防剤による防除を基本とし、降雨後は浸透移行性のある薬剤で防除を実施する。

(2) 多発が予測される場合には、予防剤 (開葉期) + 浸透移行性のある剤 (2～3 葉期) で体系防除を実施する。

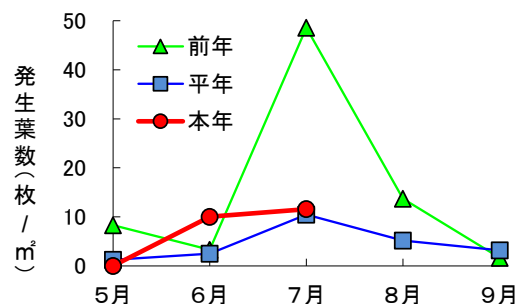


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図 1 参照)

発生葉数：10.3 枚/m² (平年 1.5 枚、前年 0 枚)

平年比：多 (+)

(2) 8 月の気象予報

降水量は並で、並発生条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉や茎の傷口から感染するため、整枝後は直ちに防除を行う。

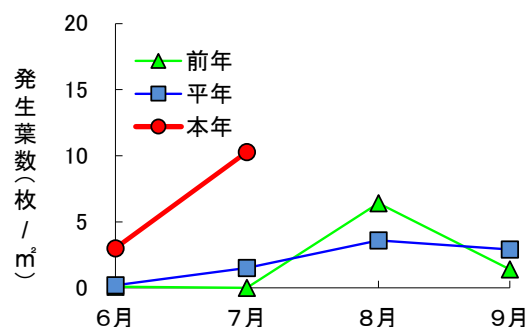


図1 輪斑病の発生葉数の推移

3. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：8.0% (平年 1.1%、前年 0.6%)

平年比：多〈+〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

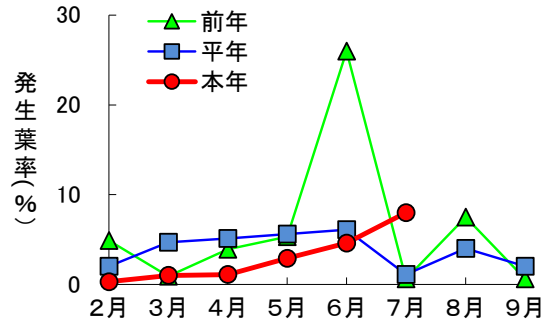


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

4. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査

発生株率(雄繭)：5.0% (平年 6.1%、前年 5.0%)

平年比：並〈±〉

発生株率(雌成虫)：7.1% (平年 6.6%、前年 4.3%)

平年比：並〈±〉

(2) 8月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

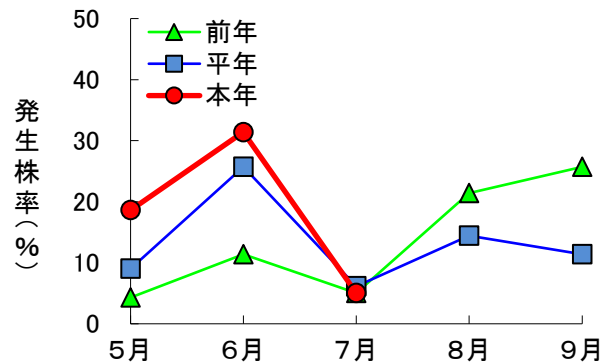


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：43.7頭/4ヶ所 (平年 17.9頭、前年 1.4頭)

平年比：多〈+〉

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：多〈+〉

(2) 8月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋芽の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

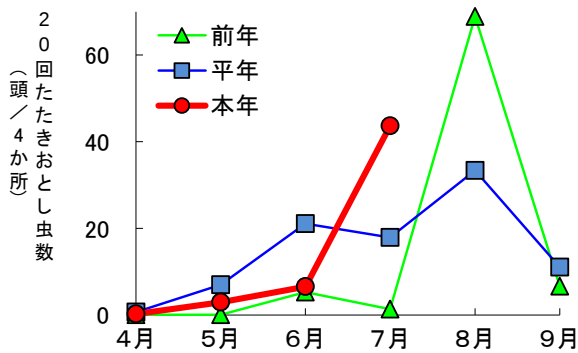


図1 チャノキロアザミウマの茶での発生推移

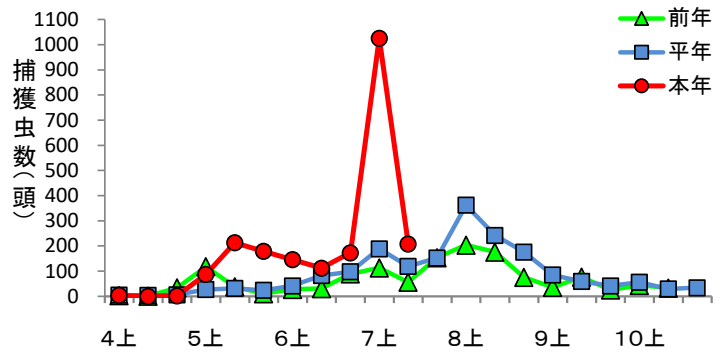


図2 吸引粘着トラップによるチャノキロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

6. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：3.6頭/4ヶ所 (平年3.2頭、前年7.1頭)

平年比：並(±)

(2) 8月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の発生を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。

(2) 多発生園では、さらに一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

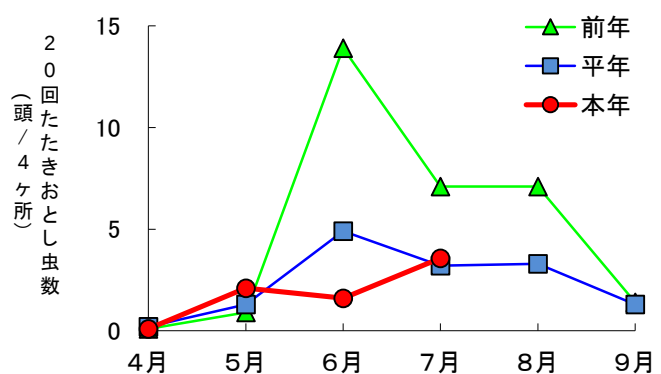


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

7. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数：21.6枚/m² (平年6.0枚、前年15.6枚)

平年比：多(+)

② フェロモントラップ (図2、3 参照)

平年比：並(±)

(2) 8月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 8月上旬～中旬頃(発蛾盛期から7～10日後)が防除適期である。

(2) 幼虫の齢数が進むにつれ薬剤の効果が低下するので、防除が遅れないようにする。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

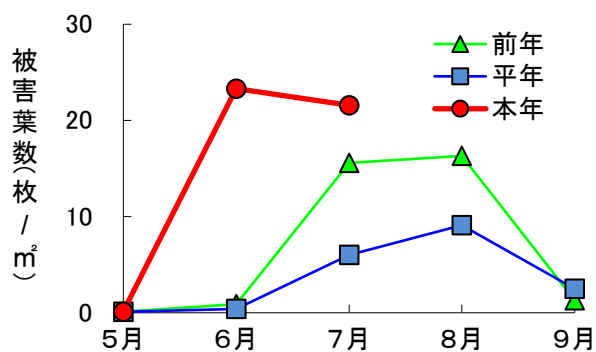


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

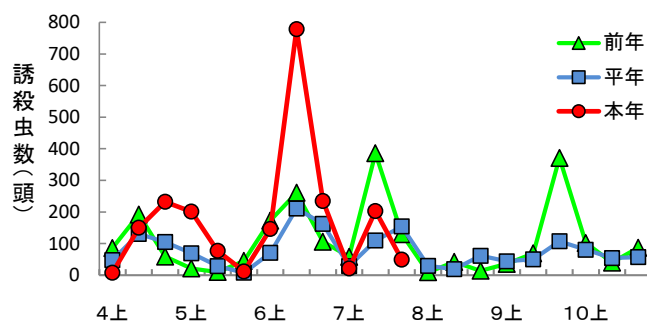


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

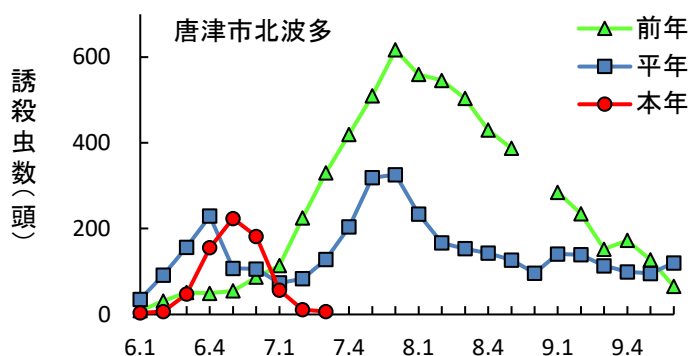
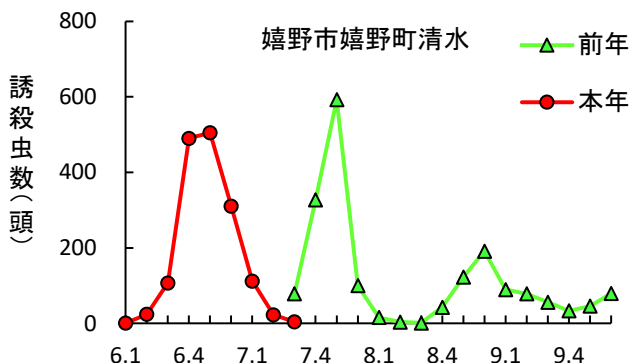
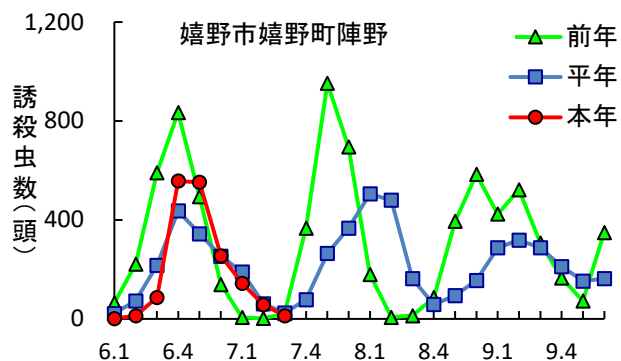


図3 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの半月別誘殺数推移(唐津市・嬉野市、防除員調査)

8. チャノホソガ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、)

被害葉数：0.4 枚/m² (平年0.7 枚、前年0 枚)

平年比：並 (±)

② フェロモントラップ (図2、3 参照)

平年比：やや少 (〜±)

(2) 8月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

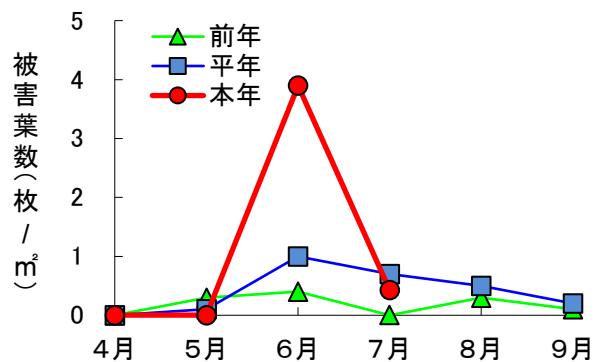


図1 チャノホソガの被害葉数の推移

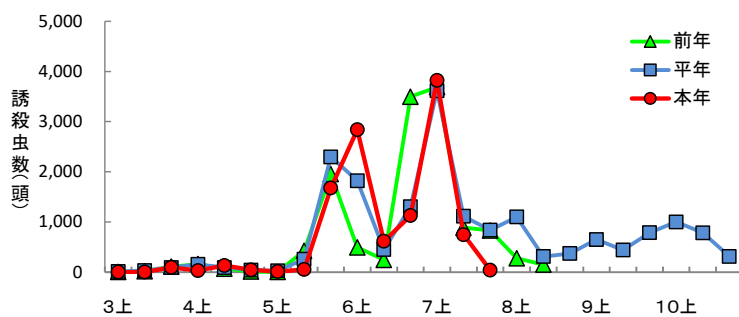


図2 フェロモントラップによるチャノホソガの旬別誘殺数の推移
(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

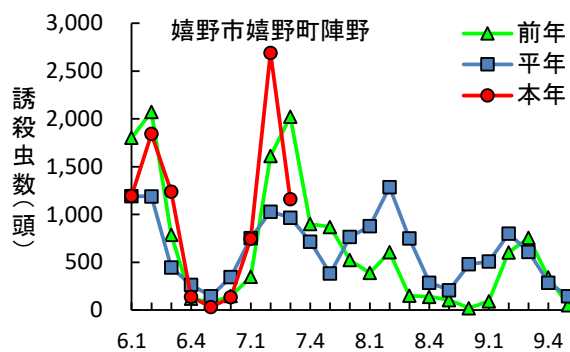
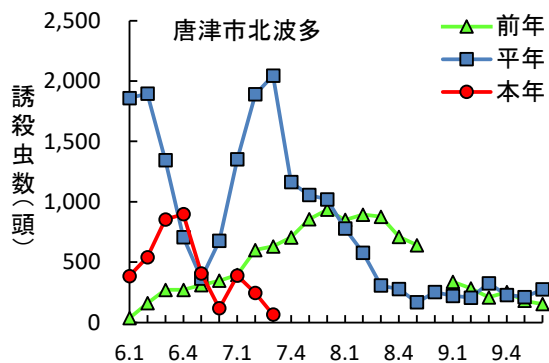


図3 フェロモントラップによるチャノホソガの半旬別誘殺数推移 (唐津市・嬉野市、防除員調査)

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

